二人小町

芥川龍之介

青空文庫

一

小野の小町、几帳の陰に草紙を読んでいる。そこへ突然黄泉の使が現れる。黄泉の使は色の黒い若者。しかも耳は兎の耳である。

小町　（驚きながら）誰です、あなたは？

使　黄泉の使です。

小町　黄泉の使！　ではもうわたしは死ぬのですか？　もうこの世にはいられないのですか？　まあ、少し待って下さい。わたしはまだ二十一です。まだ美しい盛りなのです。どうか命は助けて下さい。

使　いけません。わたしは一天万乗の君でも容赦しない使なのです。

小町　あなたは情を知らないのですか？　わたしが今死んで御覧なさい。深草の少将はどうするでしょう？　わたしは少将と約束しました。天に在っては比翼の鳥、地に在っては連理の枝、――ああ、あの約束を思うだけでも、わたしの胸は張り裂けるようです。少将はわたしの死んだことを聞けば、きっと歎き死に死んでしまうでしょう。

使　（つまらなそうに）歎き死が出来れば仕合せです。とにかく一度は恋されたのですから、……しかしそんなことはどうでもよろしい。さあ地獄へお伴しましょう。

小町　いけません。いけません。あなたはまだ知らないのですか？　わたしはただの体ではありません。もう少将の胤を宿しているのです。わたしが今死ぬとすれば、子供も、――可愛いわたしの子供も一しょに死ななければなりません。（泣きながら）あなたはそれでも好いと云うのですか？　闇から闇へ子供をやっても、かまわないと云うのですか？

使　（ひるみながら）それはお子さんにはお気の毒です。しかし閻魔王の命令ですから、どうか一しょに来て下さい。何、地獄も考えるほど、悪いところではありません。昔から名高い美人や才子はたいてい地獄へ行っています。

小町　あなたは鬼です。羅刹です。わたしが死ねば少将も死にます。少将の胤の子供も死にます。三人ともみんな死んでしまいます。いえ、そればかりではありません。年とったわたしの父や母もきっと一しょに死んでしまいます。（一層泣き声を立てながら）わたしは黄泉の使でも、もう少し優しいと思っていました。

使　（迷惑そうに）わたしはお助け申したいのですが、……

小町　（生き返ったように顔を上げながら）ではどうか助けて下さい。五年でも十年でもかまいません。どうかわたしの寿命を延ばして下さい。たった五年、たった十年、――子供さえ成人すれば好いのです。それでもいけないと云うのですか？

使　さあ、年限はかまわないのですが、――しかしあなたをつれて行かなければ代りが一人入るのです。あなたと同じ年頃の、……

小町　（興奮しながら）では誰でもつれて行って下さい。わたしの召使いの女の中にも、同じ年の女は二三人います。阿漕でも小松でもかまいません。あなたの気に入ったのをつれて行って下さい。

使　いや、名前もあなたのように小町と云わなければいけないのです。

小町　小町！　誰か小町と云う人はいなかったかしら。ああ、い

ます。います。（発作的に笑い出しながら）玉造の小町と云う人がいます。あの人を代りにつれて行って下さい。

使　年もあなたと同じくらいですか？

小町　ええ、ちょうど同じくらいです。ただ綺麗ではありませんが、――器量などはどうでもかまわないのでしょう？

使　（愛想よく）悪い方が好いのです。同情しずにすみますから。

小町　（生き生きと）ではあの人に行って貰って下さい。あの人はこの世にいるよりも、地獄に住みたいと云っています。誰も逢う人がいないものですから。

使　よろしい。その人をつれて行きましょう。ではお子さんを大事にして下さい。（得々と）黄泉の使も情だけは心得ているつもりなのです。

使、突然また消え失せる。

小町　ああ、やっと助かった！　これも日頃信心する神や仏のお計らいであろう。（手を合せる）八百万の神々、十方の諸菩薩、どうかこの嘘の剥げませぬように。

二

黄泉の使、玉造の小町を背負いながら、闇穴道を歩いて来る。

小町　（金切声を出しながら）どこへ行くのです？　どこへ行くのです？

使　地獄へ行くのです。

小町　地獄へ！　そんなはずはありません。現に昨日安倍の晴明も寿命は八十六と云っていました。

使　それは陰陽師の嘘でしょう。

小町　いいえ、嘘ではありません。安倍の晴明の云うことは何でもちゃんと当るのです。あなたこそ嘘をついているのでしょう。そら、返事に困っているではありませんか？

使　（独白）どうもおれは正直すぎるようだ。

小町　まだ強情を張るつもりなのですか？　さあ、正直に白状しておしまいなさい。

使　実はあなたにはお気の毒ですが、……

小町　そんなことだろうと思っていました。「お気の毒ですが、」どうしたのです？

使　あなたは小野の小町の代りに地獄へ堕ちることになったのです。

小町　小野の小町の代りに！　それはまた一体どうしたんです？

使　あの人は今身持ちだそうです。深草の少将の胤とかを、……

小町　（憤然と）それをほんとうだと思ったのですか？　嘘ですよ。あなた！　少将は今でもあの人のところへ百夜通いをしているくらいですもの。少将の胤を宿すのはおろか、逢ったことさえ一度もありはしません。嘘も、嘘も、真赤な嘘ですよ！

使　真赤な嘘？　そんなことはまさかないでしょう。

小町　では誰にでも聞いて御覧なさい。深草の少将の百夜通いと云えば、下司の子供でも知っているはずです。それをあなたは嘘とも思わずに、……あの人の代りにわたしの命を、……ひどい。ひどい。ひどい。（泣き始める）

使　泣いてはいけません。泣くことは何もないのですよ。（背中

から玉造の小町を下す）あなたは始終この世よりも、地獄に住みたがっていたでしょう。して見ればわたしの欺されたのは、反って仕合せではありませんか？

小町　（嚙みつきそうに）誰がそんなことを云ったのです？

使　（怯ず怯ず）やっぱりさっき小野の小町が、……

小町　まあ、何と云う図々しい人だ！　嘘つき！　九尾の狐！　男たらし！　騙り！　尼天狗！　おひきずり！　もうもうもう、今度顔を合せたが最後、きっと喉笛に嚙みついてやるから。口惜しい。口惜しい。口惜しい。（黄泉の使をこづきまわす）

使　まあ、待って下さい。わたしは何も知らなかったのですから、――まあ、この手をゆるめて下さい。

小町　一体あなたが莫迦ではありませんか？　そんな嘘を真に受けるとは、……

使　しかし誰でも真に受けますよ。……あなたは何か小野の小町に恨まれることでもあるのですか？

小町　（妙に微笑する）あるような、ないような、……まあ、あるのかも知れません。

使　するとその恨まれることと云うのは？

小町　（軽蔑するように）お互に女ではありませんか？

使　なるほど、美しい同士でしたっけ。

小町　あら、お世辞などはおよしなさい。

使　お世辞ではありませんよ。ほんとうに美しいと思っているのです。いや、口には云われないくらい美しいと思っているのです。

小町　まあ、あんな嬉しがらせばっかり！　あなたこそ黄泉には似合わない、美しいかたではありませんか？

使　こんな色の黒い男がですか？

小町　黒い方が立派ですよ。男らしい気がしますもの。

使　しかしこの耳は気味が悪いでしょう。

小町　あら、可愛いではありませんか？　ちょいとわたしに触らして下さい。わたしは兎が大好きなのですから。（使の兎の耳を玩弄にする）もっとこっちへいらっしゃい。何だかわたしはあなたのためなら、死んでも好いような気がしますよ。

使　（小町を抱きながら）ほんとうですか？

小町　（半ば眼を閉じたまま）ほんとうならば？

使　こうするのです。（接吻しようとする）

小町　（突きのける）いけません。

使　では、……では嘘なのですか？

小町　いいえ、嘘ではありません。ただあなたが本気かどうか、それさえわかれば好いのです。

使　では何でも云いつけて下さい。あなたの欲しいものは何ですか？　火鼠の裘ですか、蓬莱の玉の枝ですか、それとも燕の子安貝ですか？

小町　まあ、お待ちなさい。わたしのお願はこれだけです。――どうかわたしを生かして下さい。その代りに小野の小町を、――あの憎らしい小野の小町を、わたしの代りにつれて行って下さい。

使　そんなことだけで好いのですか？　よろしい。あなたの云う通りにします。

小町　きっとですね？　まあ、嬉しい。きっとならば、……（使を引き寄せる）

使　ああ、わたしこそ死んでしまいそうです。

三

大勢の神将、あるいは戟を執り、あるいは剣を提げ、小野の小町の屋根を護っている。そこへ黄泉の使、蹌踉と空へ現れる。

神将　誰だ、貴様は？

使　わたしは黄泉の使です。どうかそこを通して下さい。

神将　通すことはならぬ。

使　わたしは小町をつれに来たのです。

神将　小町を渡すことはなおさらならぬ。

使　なおさらならぬ？　あなたがたは一体何ものです？

神将　我々は天が下の陰陽師、安倍の晴明の加持により、小町を守護する三十番神じゃ。

使　三十番神！　あなたがたはあの嘘つきを、――あの男たらしを守護するのですか？

神将　黙れ！　か弱い女をいじめるばかりか、悪名を着せるとは怪しからぬやつじゃ。

使　何が悪名です？　小町はほんとうに、嘘つきの男たらしではありませんか？

神将　まだ云うな。よしよし、云うならば云って見ろ。その耳を二つとも削いでしまうぞ。

使　しかし小町は現にわたしを……

神将　（憤然と）この戟を食らって往生しろ！　（使に飛びかかる）

使　助けてくれえ！　（消え失せる）

四

数十年後、老いたる女乞食二人、枯芒の原に話している。一人は小野の小町、他の一人は玉造の小町。

小野の小町　苦しい日ばかり続きますね。

玉造の小町　こんな苦しい思いをするより、死んだ方がましかも知れません。

小野の小町　（独り語のように）あの時に死ねば好かったのです。黄泉の使に会った時に、……

玉造の小町　おや、あなたもお会いになったのですか？

小野の小町　（疑深そうに）あなたもと仰有るのは？　あなたこそお会いになったのですか？

玉造の小町　（冷やかに）いいえ、わたしは会いません。

小野の小町　わたしの会ったのも唐の使です。

しばらくの間沈黙。黄泉の使、忙しそうに通りかかる。

玉造の小町　」

小野の小町　」黄泉の使！　黄泉の使！

黄泉の使　誰です、わたしを呼びとめたのは？

玉造の小町　（小野の小町に）あなたは黄泉の使を御存知ではありませんか？

小野の小町　（玉造の小町に）あなたも知らないとはおっしゃれますまい。（黄泉の使に）このかたは玉造の小町です。あなたはとうに御存知でしょう。

玉造の小町　このかたは小野の小町です。やっぱりあなたのお馴

染でしょう。

使　何、玉造の小町に小野の小町！　あなたがたが、――骨と皮ばかりの女乞食が！

小野の小町　どうせ骨と皮ばかりの女乞食ですよ。

玉造の小町　わたしに抱きついたのを忘れたのですか？

使　まあ、そう腹を立てずに下さい。あんまり変っていたものですから、つい口を辷らせたのです。……時にわたしを呼びとめたのは、何か用でもあるのですか？

小野の小町　ありますとも。どうか黄泉へつれて行って下さい。

玉造の小町　わたしも一しょにつれて行って下さい。

使　黄泉へつれて行け？　冗談を云ってはいけません。またわたしを欺すのでしょう。

玉造の小町　あら、欺しなどするものですか！

小野の小町　ほんとうにどうかつれて行って下さい。

使　あなたがたを！　（首を振りながら）どうもわたしには受け合われません。またひどい目に会うのは嫌ですから、誰かほかのものにお頼みなさい。

小野の小町　どうかわたしを憐れんで下さい。あなたも情は知っているはずです。

玉造の小町　そんなことを云わずに、つれて行って下さい。きっとあなたの妻になりますから。

使　駄目です。駄目です。あなたがたにかかり合うと――いや、あなたがたばかりではない、女と云うやつにかかり合うと、どんな目に会うかわかりません。あなたがたは虎よりも強い。内心如夜叉の譬通りです。第一あなたがたの涙の前には、誰でも意気地がなくなってしまう。（小野の小町に）あなたの涙などは凄いものですよ。

小野の小町　嘘です。嘘です。あなたはわたしの涙などに動かされたことはありません。

使　（耳にもかけずに）第二にあなたがたは肌身さえ任せば、どんなことでも出来ないことはない。（玉造の小町に）あなたはその手を使ったのです。

玉造の小町　卑しいことを云うのはおよしなさい。あなたこそ恋を知らないのです。

使　（やはり無頓着に）第三に、――これが一番恐ろしいのですが、第三に世の中は神代以来、すっかり女に欺されている。女と云えばか弱いもの、優しいものと思いこんでいる。ひどい目に会わすのはいつも男、会わされるのはいつも女、――そうよりほかに考えない。その癖ほんとうは女のために、始終男が悩まされている。（小野の小町に）三十番神を御覧なさい。わたしばかり悪ものにしていたでしょう。

小野の小町　神仏の悪口はおよしなさい。

使　いや、わたしには神仏よりも、もっとあなたがたが恐ろしいのです。あなたがたは男の心も体も、自由自在に弄ぶことが出来る。その上万一手に余れば、世の中の加勢も借りることが出来る。このくらい強いものはありますまい。またほんとうにあなたがたは日本国中至るところに、あなたがたの餌食になった男の屍骸をまき散らしています。わたしはまず何よりも先へ、あなたがたの爪にかからないように、用心しなければなりません。

小野の小町　（玉造の小町に）まあ、何と云う人聞きの悪い、手

前勝手な理窟でしょう。

玉造の小町　（小野の小町に）ほんとうに男のわがままには呆れ返ってしまいます。（黄泉の使に）女こそ男の餌食です。いいえ、あなたが何と云っても、男の餌食に違いありません。昔も男の餌食でした。今も男の餌食です。将来も男の、……

使　（急に晴れ晴れと）将来は男に有望です。女の太政大臣、女の検非違使、女の閻魔王、女の三十番神、――そういうものが出来るとすれば、男は少し助かるでしょう。第一に女は男狩りのほかにも、仕栄えのある仕事が出来ますから。第二に女の世の中は今の男の世の中ほど、女に甘いはずはありませんから。

小野の小町　あなたはそんなにわたしたちを憎いと思っているのですか？

玉造の小町　お憎みなさい。お憎みなさい。思い切ってお憎みなさい。

使　（憂鬱に）ところが憎み切れないのです。もし憎み切れるとすれば、もっと仕合せになっているでしょう。（突然また凱歌を挙げるように）しかし今は大丈夫です。あなたがたは昔のあなたがたではない。骨と皮ばかりの女乞食です。あなたがたの爪にはかかりません。

玉造の小町　ええ、もうどこへでも行ってしまえ！

小野の小町　まあ、そんなことを云わずに、……これ、この通り拝みますから。

使　いけません。ではさようなら。（枯芒の中に消える）

小野の小町　どうしましょう？

玉造の小町　どうしましょう？

二人ともそこへ泣き伏してしまう。

（大正十二年二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
　1987（昭和62）年2月24日第1刷発行
　1995（平成7）年4月10日第6刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
1999年1月10日公開
2004年3月10日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人小町

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/